



にわとりハウス

1話 《序》

まほ(私)21歳、そしてK姉21+12歳。職業共にデザイナー。あるきっかけで意気投合した二人は都心の一軒家で共同生活を始める。この春から就職するまほ、初めて親元を離れるK姉。新たな「場所×人×仕事」は二人の何を変えるのか。

2話

二人の家は外苑脇に位置する。自然の多さを条件に探した結果、適度な勾配と並木のスケールを感じるこの場所が一目で気に入ったから。私は並木を自転車で抜けた所の小さな制作会社に勤める。K姉は大手服飾メーカーのインハウスデザイナーとして10年丸の内に通っている。

3話

おはようと言うK姉の声で起こされる。家の間取りは縦一線だ。つまり私の部屋を抜けないと玄関まで行けない。まあ朝が苦手な私にとっては好都合ということで、それほど問題ではない。眠い目を擦りつつ本日私は、初出勤を迎える。

4話

初出勤を終え家に戻ると、開口一番「いい男いた？」と聞くK姉。他に聞くことあるだろうよ、とつれない返事をするが、女性比率の極めて高いK姉の属する服飾業界の説明を延々と受けるに、男性も女性も適度にいる私の職場環境に感謝したほうがよさそうだ。

5話

新入社員風の装いだけのごめんだ。今朝はK姉の身支度を観察しながら洋服を拝借。計らずとも私はバリキャリ仕様に変身できた。今年の流行色は何だとか、ためになる話もありがとう。K姉よ、本日の茶系ラップスカート、すこぶる社内で好評であります！

6話

いつも通り社内で挨拶を発したところ険悪な空気。徹夜部隊が多く、おはようどころじゃねーよ、呑気な新人め！と言いたげだ。暫くは暗黙ルールを見つけることに徹したら？と言うK姉からの助言を反復した。この場合「おつかれさまです」が良答だろうか。

7話

唯一の同期、優は黙々と机に向かっていた。正直なところ昨夜はくやしかった。薄っぺらな自分の尺度に嫌気がさすけれど、優が初めて徹夜仕事を任された一方、私は帰宅するしかなかったのだ。来客用のお茶を準備するが、パーテーションの向こう、優のモニタが気になる。

8話

家の明かりが消えている。ダイニング机。ピンクの表紙が際立つ「負け犬の遠吠え」。K姉が買って来たんだな。パラッとめくる。地方から東京にでてきた女は既に負け犬ときたか。ん、もういい。K姉は何を思って読んだのだろうか。

9話

丑三つ時の青山墓地、並木先の闇に並ぶ休憩中タクシーは馴染み。夜は危険という一抹の不安を払拭するが如く、踏み外さんばかりに猛スピードで自転車のペダルをこいで帰宅する、儀式。夜間にK姉と顔を合わすことは殆どなくなった。

10話

休日の度、K姉の友人らが我が家を訪れる。昨日は職場の後輩3人組。K姉の私生活に対する質問攻めだった。K姉、当たり前だけど、職場ではすごいんだね。彼女らの敬意がひしひしと伝わる一方、私にはそのギャップが可笑しすぎる。

11話

久しぶりに明かりが灯っているので隣の部屋を覗く。床に就かんとするK姉。仕事の件で聞きたい事があると理由付けしたものの、取るに足りない話を無防備に始めてしまった。K姉の聞き役に私は依存している。そういえば、先日の3人組が私を遊びに誘ってくれたらしい。

12話

「おはよう」とK姉のお尻に挨拶。寝起きに虚ろな私がダイニングに足を運ぶと背を向けたK姉、程良く肉付いた形のよいお尻しか目に入らない。今日、お尻に挨拶していたことが本人にバレた。歴代の彼氏が好きだったパーツ、ついにお主も男性化したのかと。

13話

交代で朝食と弁当の支度をしていたが、私の帰宅が遅いせいで任せっきり。すまぬ。冷蔵庫を覗くと翌朝の仕込みが並んでいる。私は冷蔵庫の中からK姉を、K姉は物音から私の存在を感じて寝る。結局伝言板は使っていない。互いの存在と変化をこの家から感じとっている。

14話

先日の三人組に誘われK姉と共に知人のOPパーティーにお邪魔。ここでもK姉、聞き上手っぷりを発揮。後輩君～父親程の男性をも唸らせる。女性は初対面で男性に言い寄られる人、そうでない人と二分されるのね。2人で家を出たのに、私1人家に帰ってきた。

15話

目覚めの遅い休日の午後。私はK姉がちゃんと家にいるか気になり寢床から耳を澄ませる。ああ、いるじゃない。K姉、昨晚は結局誰といた？私の予想はあの後輩君。途中までは正解、年齢の近いアーティストな彼と共に3人一緒にいたけど、後輩君は途中で帰ったと。

16話

あれから私は、人事ながらK姉と2人の男性について思考を巡らせる。マメな後輩君は草食系、忠誠心あり。アーティストな彼はオレオレ系、受身でないと難し。二人に共通しているのは、K姉への好意余って私に嫉妬の眼を向け疎ましがむ傾向。同居人から、恋人、父親へ昇進中。

17話

職場で隣席の坊主先輩に隠し撮りされた。曰く、新入社員が残業続き&出会いナシも可哀想、俺が制作した婚活系ソーシャルメディアに載せてあげるとな。兄心の先輩に無心で返答。私なんかではアクセス稼げない…。公私に渡り売れっ子のK姉を机上から思う。

18話

夢の中でK姉が私の部屋を横切る。掃除機を手に、次は洗濯物を。何度も往復するうちに目が覚めた、風通しの良い日曜の午後。K姉のお婿に私、立候補しようか。

19話

この連休、我が家への訪問者が増える。幼なじみからサークル仲間まで。ケータリング担当は私。昨月タイより現地調達してきたスパイスが超過気味のため、練習を兼ねて朝から晩まで全てタイ料理攻めでいく。みそ汁を思い、鍋を開けたK姉が見たものはトムヤンクン。暫く警戒あれ。

20話

ひと回り年の離れた女先輩、社内ですれ違うだけでも怖気付く。その先輩が招集をかける「私と仕事したことある人！」下請け絡みしかない迷いで反応が遅れる私。「あなた、この前手伝ってくれたよね」と優しきご指名。2次会の仲間分けゲームのお陰で晴れた気分。母心で聞くK姉。

21話

毛筆で「絆」と書かれたTシャツ。以前K姉から聞いた気になる人物は、アーティストな彼、後輩君とはまた別種であった。何かコダワリがあるのかしら。真っ当なリーダー格の彼に小さな質問をする勇気なし。K姉の所属するランニング部のホームパーティー終了、絆氏との初対面日。

22話

共同生活開始数ヶ月にして、二人の五感は一層過敏になった。殊にシャンプー、化粧品の変化は得意分野。常に聞き役のK姉が饒舌だった昨日、本命が絆氏だったことにも私の感覚が働く。我が家恒例、理想の名字ブレストがいつになく盛り上がる夜。

23話

普段は当番制で行う買い出し、今日は二人で行った。買い物カゴの中身に互いが色気を出し始め無駄に盛り上がる。帰宅早々、暑くなった部屋に潜む培養中のヨーグルトの様子を確かめに走る私を見るに「実家の母を思い出す」と玄関先でボヤクK姉。

24話

隣室から浮き立った松田聖子メドレーが聞こえる。K姉は全曲空で歌えるんだと豪語する。ジェネレーションギャップ甚だしく理解できずにいるが。とにかく「気分が良い」という一つの表現なんだね。生返事をする私は、バランスボール上での平泳ぎが好調の印である。

25話

この時間家にいるのは久しぶり。K姉はいない。思えば1年前の真夏日、私がバイトで働く広告代理店を訪れた取引先のK姉は部長室のある5階から降りてきた。私は4階から上がるどころ、白くひんやりとした階段の踊り場で鉢合わせた。これが今に続く最初の出会い。

26話

それから半年足らずして、取引先社員(K姉)と学生バイト(私)は共同生活 計画を始めた。互いの立場を知る人等は物問いたげだった。無論、私たちの感覚は同棲を始める男女に近い。異文化交流ながら二人各々の高みを目指せるならば最高だよねと。

27話

共同生活により二人が共有したのはマグマの部分。付随する事物や経過はお互い割り切って考える。知恵熱を抱えて帰宅した私は、浴室でK姉が使用したバスソルト香にクラっとするが、なんか楽しそうでいいなあと床に付く。どうやら絆氏とイベント企画中らしい。

28話

台所で食器を洗うと共にぼろぼろ涙がこぼれる。唯一の職場同期、優が突如退職することになった。互いを気にするあまり、話をする機会は少なかったが。新人二人最初の仕事は来客コップ洗いだったことを思う。無力な自分と楽しそうなK姉。怨めしさが募り、声をかける気力もない。

29話

家の外からでも浴室灯が付いていることが分かった。連日遅い帰宅で疲れている。早く風呂入って寝たい。どうか灯の消し忘れであってほしいと願いながら玄関を開ける。シャワーの音、入浴中だった。初めてK姉に嫌悪感を抱く。思えばルールらしきもの無くここまで来たものな。

30話

私からK姉へ「お風呂は私が帰宅する24時までに入ってくださいませ」K姉から私へ「お部屋を片付けてくださいませ」さらに私はK姉へ押し戻す「週一回、週末頑張るので許してくださいませ」... 結果合意。共同生活始めて以来、互いのルールが決まった。